

秋は文化祭のシーズンである。中学校では、文化祭と言ったり学習発表会と言ったりしている。その学校独自の名称もある。本校だと「玉梨音（おりおん）祭」である。コロナ禍が続く中で、各学校とも感染対策に気を配りながら、主体的に生徒が活動できるようにと、様々な工夫を重ねたことと思う。

以前、勤めた学校でも文化祭があった。合唱コンクール、生徒発表、文化部の発表、掲示、PTAによる模擬店など、今思うと大がかりなものだった。その分、充実感や達成感もあったように記憶している。

また、全校企画というものがあつた。毎年、どんなことをやるのか企画段階から練っていく。例えば、ビッグアートというものがある。一人一人が分担されたピースを作製し、文化祭当日に全体像が披露されるというものである。

あるとき、全校企画の担当となつた先生が、私のところにやってきた。そして随分と控えめに「高澤先生、今年の全校企画で、全校群読をやってみたいんです。協力していただけませんか」N先生である。私より年上の保健体育の先生である。

私が国語の授業で群読をやっていることを知っていたらしい。さらに話を聞くと、すでに群読の題材まで決まっているらしい。森山良子さんが歌つた『さとうきび畑』である。第二次世界大戦での沖縄がモチーフになっている。

企画というものはこういうものだろう。群読が先か『さとうきび畑』が先かはわからないが、これをやりたいという思いが必要である。N先生には、子どもたちに伝えたい、わかってほしい、考えてほしいものがあつたのだと思う。きっと、『さとうきび畑』が先なのである。そこに、群読が結びつた。

N先生には、群読の指導経験がない。そこで、私の出番となつた。まもなく文化祭の準備は始まろうとしていた。すでに、生徒の係活動も役割分担が進んでいる。放課後になると、各学級ごとに合唱練習をして、その後は、自分の係の活動場所へと移動していく。生徒数が多い学校だったためか、どの係活動にも参加しない生徒が、各学級に一定数出てしまう。

『さとうきび畑』の全校群読という企画は決まつたが、問題は生徒である。誰が、この全校企画を進めるのかである。もはや、合唱練習が終わると、文化祭の準備には携わることのない一定数の生徒しかいない。私は覚悟を決めた。

各学級の一定数の生徒を一か所に集めた。いったい何が始まるのかと不安げな生徒もいれば、何も考えてはいない1年生もいる。特に、3年生は、少なくとも肯定的にとらえてはいない表情をしていた。きっとこれから何かしらのご指導が始まると思つていたのである。

おもむろに今回の全校企画の説明を始めた。N先生も、この全校群読にかける思いを話された。そして、説明が終わると「この全校企画を君たちに任せたい。特に3年生には、リーダーシップを発揮して、必ず成功に導いてほしい」という話をした。

最初は、困惑したような表情だった。それはそうであろう。今までこんなことを言われたことはないだろう。だが、『さとうきび畑』の詩はある。これをどのように群読するかは、3年生が話し合つて群読台本、群読プランをつくつてほしい。君たちがつくつた群読プランで全校生が体育館で群読をするようになる。頼んだぞ」3年生の表情がみるみる変わつていった。あの目の輝きは今でも忘れない。3年生のリーダー、すなわち全校群読のプロジェクトリーダーに就任したY君の笑顔は最高だった。

この会の終了後、早速、3年生たちは『さとうきび畑』の詩を見ながら、ああでもない、こうでもない話し合いを始めた。あの時点で、全校企画「全校群読」の成功は約束されていたのだろう。その陰には、一人の熱い思いをもつた教師がいた。N先生には、ずっと感謝している。私が、生徒を信頼し、任せることの大切さを知るきっかけを与えてくれた。全校群読の当日、体育館には「ざわわ ざわわ ざわわ」が響き渡つた。